

み うら かず み
三 浦 和 美

学位の種類 博士(教育情報学)

学位記番号 教情博第24号

学位授与年月日 平成25年3月27日

学位授与の要件 学位規則第4条1項該当

研究科・専攻 東北大学大学院教育情報学教育部(博士課程後期3年の課程)
教育情報学専攻

学位論文題目 大学教職課程における効果的な小学校社会科授業力育成に
関する実践的研究
—小学校社会科教育法の講義・演習の実践を通して—

論文審査委員 (主査)
教授 渡部 信一 教授 熊井 正之
准教授 中島 平

〈論文内容の要旨〉

本研究では、小学校社会科教員を養成するための大学教職課程において、効果的な授業力育成を目的とした実践的研究を行っている。

第1章では本研究の問題と目的を示している。本論文では、小学校社会科が公民的資質の基礎を養う重要な教科であるにも関わらず、子どもたちも教師も苦手であるという問題意識から出発している。また、近年、教員の大量退職の時代が到来し、授業力のある教員の養成が求められていることもあげている。さらに、先行研究からこれまで小学校社会科の講義内容の検討に関する研究が少なく、講義内容と小学校社会科の授業内容が相互に関連し合っていないところに問題の所在があることを指摘している。

こうした社会的背景から教職課程において効果的な小学校社会科授業力育成を図る必要があると考えたことを、本研究に取り組む動機としている。

本章ではまず、本研究において育てたい「小学校社会科授業力」を定義し、その系統性を示し

ている。また、効果的な小学校社会科授業力育成の視点として、1. 理論と実践を兼ね備えた講義内容の構築と2. ICTを活用した「振り返り」の実施の2つを設定している。

第2章では、上の第1の視点に立って「社会科概論」「社会科の指導法」「社会科教材研究」の3つの講義で理論的学習を行ったのち、実践的学習を実施している。

まず、「社会科概論」で育てたい小学校社会科授業力として「社会科に関心を持つ・社会科が好きになる」と設定している。受講前には社会科が苦手とした学生が、講義の中で社会科誕生の経緯や社会科の目標を理解し、授業スケッチという実践的な学習を経ることで、社会科や授業作りに積極的に関わろうとするような変化が生じた。

特に、講義後の感想を分析した結果、「社会科概論」においては「社会科に関心を持つ・社会科が好きになる」という小学校社会科授業力が育成されたとしている。

次に、「社会科の指導法」で育てたい小学校社会科授業力を「授業を構想する力」と設定し、教科書分析や10分間の模擬授業を行う活動を実践している。講義の後、学生の感想には「指導案の書き方や授業をどう進めたら子ども達に分かりやすい授業にできるかを考えることができた」「ここまで授業の内容について考えたことはなかった。これからも回数を重ね、子どもの状況に応じて瞬時に構成を考えられるようになりたい」などの記述が多く認められ、これらの活動を通して授業を構想する力をつけたとしている。

最後に、「社会科教材研究」で育てたい小学校社会科授業力は「基礎的な実践力」と設定し、実践を行っている。学生による授業評価結果から、講義を理解したことや本講義が自分にとって有意義であったことが明らかになった。さらに、自由記述においても実際に授業を行うことで自分の授業の良さや改善点に気付くことができたという記述が見られた。

また、3講義を連続受講した6名の学生へのアンケート調査・インタビュー調査結果から、本研究の講義実践前後で変わったこととして、①社会科が好きになった②社会科への関心がました、そして③社会自体への関心が深くなったことが挙げられた。

第3章では、第2の視点であるICTを活用した「振り返り」として、学習管理システム(LMS)によるミニットペーパーの活用法を実践している。毎回の講義の感想や質問に対してLMSを活用し、学生に素早くフィードバックすることで、講義の振り返りが効果的にできるようになった。また、ICTの活用によって情報に対する関心を高め、新たな学びへの取り組みを促すことが明らかになったとしている。

第4章では、少人数の演習を対象とした小学校社会科授業力育成の実践を行っている。

ここでは、手書きパッドを活用し授業のリフレクションを支援するためのシステム開発を行っている。これにより講義の「映像」「授業評価データ」「記述」を結びつけた気づきを得ることができ、初学者であってもピンポイントで効果的に授業を振り返ることができることが示唆されたとしている。この学習体験は、多忙を極める教育現場に入ったのちにも自律して授業改善を行うことにつながるとしている。

第5章で本論文全体をまとめている。本研究の結果から、効果的な小学校社会科授業力育成を図るには、1. 理論と実践を兼ね備えた講義内容の構築 2. ICT を活用した「振り返り」の実施が有効であることが示唆されたとする。

さらに、残された課題として、小学校社会科教育法の講義内容のさらなる改善と教員となった卒業生の追跡調査が必要不可欠であることを示している。

〈論文審査の結果の要旨〉

審査会では、20分間のプレゼンの後、30分間の質疑応答を実施した。

本研究は小学校社会科教員を養成するための大学教職課程において効果的な授業力育成を目的とした実践的研究を行っている点は、大学における教員養成見直しが大きな話題になっている今日的テーマとして評価できる。また、近年、教員の大量退職の時代が到来し、授業力のある教員の養成が求められている点からも重要なテーマである。さらに、これまで小学校社会科の講義内容の検討に関する研究が少なく、講義内容と小学校社会科の授業内容が相互に関連し合っていないことが指摘している今日、有意義な研究テーマと言える。

本論文ではまず、本研究において育てたい「小学校社会科授業力」を「社会科に関心を持つ・社会科が好きになる」そして「授業を構想する力」と定義し、その系統性を示している。また、効果的な小学校社会科授業力育成の視点として、(1)理論と実践を兼ね備えた講義内容の構築と(2)ICTを活用した「振り返り」の実施の2つを設定している。

第2章では、上の第1の視点に立って「社会科概論」「社会科の指導法」「社会科教材研究」の3つの講義で理論的学習を行ったのち、実践的学習を実施している。また、第3章と第4章では第2の視点に立ち、ICTを活用した「振り返り」の実施を行っている。具体的には、第3章では学習管理システム(LMS)によるミニットペーパーの活用を、第4章では手書きパッドを活用し授業のリフレクションを支援するためのシステム開発を行い、ともにそれらの実践が大きな効果を上げたことが示されている。

第5章で本論文全体をまとめているが、効果的な小学校社会科授業力育成を図るには「理論と実践を兼ね備えた講義内容の構築」および「ICTを活用した振り返りの実施」が必要と結論づけている。

審査の結果、筆者自身が実践者としてこれまでの実践をまとめ、さらにその成果を最先端の研究手法と融合することにより発展させている点が高く評価された。実践を中心に研究を進めており、研究の信頼性に関して一部不十分なところも見受けられるものの、筆者が長年、小学校の現場教師として実践を重ねており本論文はその経験に基づいている点を鑑みると、研究の視点や発想は高く評価できるものと審査員全員の意見の一致をみた。

よって、本論文は博士（教育情報学）の学位論文として合格と認める。